



1 カンキツ類の概況

令和6年産のカンキツ類は、貯蔵系や収穫時期の遅い中晩柑類を残すのみとなりました。貯蔵している中晩柑類は、果実の状態を点検し、果実に合わせた適期出荷によって、果実の口を軽減しましょう。また、外気温上昇に伴ってコハン症(ヤケ)の発生が懸念されますので、特に冷蔵貯蔵している中晩柑類については、出庫時までの順化(外気温に近い温度まで昇温を心掛けましょう)。

令和7年産のカンキツ類は、5月上旬は開花期となり、5〜7月にかけては生理落果期となります。温州ミカンの着花は、県農業試験場府中果樹研究所での結果母枝の水挿し調査の結果では、令和6年産の着花

(果) 状況などを踏まえると、多い傾向と予想されます。隔年結果や園地内の樹ごとの着果量のバラツキを是正し、着果負担が一樣にかかるように、樹の着花状況に合わせた管理を行いましょう。

また、開花期から落花期は、訪花害虫や灰色かび病、そうか病、黒点病の防除時期です。春先から開花期にかけて、平年よりも気温が高くなると、生育速度が早まり、開花も前進する可能性がありますので、園地の生育状況を確認して、適期防除に努めましょう。

2 温州ミカンの管理

隔年結果や園地内での樹ごとの着果量のバラツキを是正し、連年結果する園地にしていくためには、新梢の発生と着花のバランスがとれていることが重要です。それぞれの樹の着花状況に応じて、適切な管理を心掛け、安定生産に努めましょう。

この時期は新梢の伸長や開花結実など細胞分裂が盛んな時期となります。

す。新梢の緑化促進や子房の充実を図るため、尿素(500倍)やメリット青(300倍)、ジャッフル1号(300倍)等の窒素主体の液肥を開花前後から7〜10日おきに3回程度葉面散布します。

(1) 豊作樹の管理(予備枝の設定)

着花の多い樹で、新梢の数が十分でない場合は、予備枝を設定することで新梢の発生を促進し、次年産の結果母枝の確保に努めます。

せん定の時にあらかじめ設定した予備枝に着花した場合は、できるだけ早期に摘蕾を行います。

また、白筋の入った鉛筆大程度の太さで横から斜め上向きの枝の小枝を対象に、蕾や葉を取り除いて坊主枝にすることで、新梢の発生を促すことができます。

発生した新梢は、ミカンハモグリガやアブラムシ類、アゲハ幼虫などの被害を受けますので、早めの防除を徹底しましょう。

(2) 不作樹の管理

前年に着果が多かった樹は、結果母枝が少ない一方、果梗枝が多く、そこから新梢が多く発生します。

新梢と花との間での養分の競合により落果しやすい傾向があるので、まずは果梗枝を整理し、さらに樹形を乱す要因となる上向きの果梗枝も

切除します。

また、枝葉が混み合った状況では、日照不足により落果を助長しやすいので、着花部位への被さり枝を切除し、日当たりを確保します。さらに、果梗枝や亜主枝、側枝から発生した強く長い春枝や遅伸びの春枝は、芽かぎをするか、基部から切除します。

3 カンキツ類の摘果

(1) 摘果の目的と方針

摘果の目的は、果実肥大の促進、隔年結果の防止、キズ・奇形・病害虫被害果や低品質果実の除去により品質を揃えることです。温州ミカンでは中玉果が、中晩柑類では大玉果が求められます。摘果時期を早めると果実肥大が促進され、隔年結果防止効果は高くなりますが、品質は低下しやすくなります。一方、摘果時期が遅いと、果実品質は向上しやすいですが、果実の肥大が抑制され、隔年結果防止効果は低くなります。これらのことを踏まえつつ、品質や着果量に応じて粗摘果と仕上げ摘果の程度や時期を変えて着果管理し、高品質果実の安定生産を行いましょう。

摘果の方針としては、まず、一次生理落下のピークが終了する6月下旬〜7月上旬頃にかけて、中晩柑類および着果の多い極早生温州から粗摘果を行います。

小原紅早生や高糖系温州、不作傾向の樹などは、「後期重点摘果」で対応し、9月以降まで仕上げ摘果を遅らせて品質向上を目指しましょう。「後期重点摘果」については、次号で触れたいと思います。

(2) 隔年結果を是正するための摘果

温州ミカンにおいて、豊作不作を繰り返す隔年結果樹は、豊作年に「樹冠上部摘果」や樹の半分に着果した果実を全摘果する「半樹摘果」を行い、翌年の結果母枝を確保します(図1、2)。

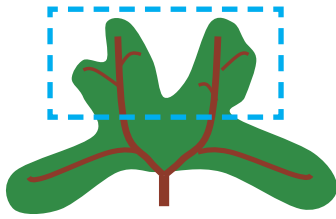


図1 樹冠上部全摘果

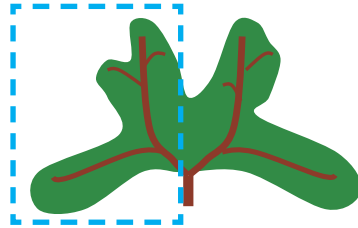


図2 半樹摘果



写真1 樹冠上部摘果した樹の夏梢発生状況(青色囲み)



写真2 樹冠上部摘果した樹の着果状況(収穫期)

「樹冠上部摘果」の処理時期は、6月中旬～7月上旬頃で、摘果程度は主枝先端から樹冠上部にかけての3分の1程度に着果した果実を摘果します(写真1、2)。「半樹摘果」の処理時期も樹冠上部摘果と同様に6月中旬～7月上旬頃で行い、主枝・垂主枝単位に樹の片側の果実2分の1程度を全摘果します(写真3、4)。摘果後



写真3 半樹摘果した樹の夏梢発生状況(青色囲み)



写真4 半樹摘果した樹の着果状況(収穫期)

の芽揃いを良くするために、短期間で行いましょう。摘果後に残果があると新梢の発生に影響しますので、再度確認して残果を残さないようにすることが大切です。摘果約2週間後から夏梢が発

生しますので、新梢へのミカンハモグリガなどの防除も忘れずに行いましょう(夏梢発生後10～14日間隔で2～3回実施)。

(3) 摘果剤を利用した摘果について

摘果の省力化を図るために、着果の多い樹では、摘果剤(ターム水溶剤、フィガロン乳剤)による摘果方法があります。このうち、ターム水溶剤は、成分の根への移行はほとんど見られないため、樹勢への影響が少ないと考えられます。

樹全体を全摘果する場合は樹全体に、部分的に全摘果する場合は摘果したい部分のみに散布します。品質が上がりにくく、着色が劣る内成り果・裾成り果を重点的に落としたい時や、樹冠上部の全摘果、樹全体の間引き摘果を行いたい時に効果的です。全摘果を目的として散布した際に、散布だけでは落ち切らず残果がある場合は、補正摘果を行います。ただし、摘果剤を利用した摘果は、人力摘果と比較すると夏梢の発生が少なくなりやすい傾向があることに留意してください。

表1にターム水溶剤、表2にフィガロン乳剤の摘果に関わる登録内容を載せてありますので使用方法や使用時期、注意事項などを参考にしてください。

表1 ターム水溶剤の摘果目的での使用方法

適用作物名	使用目的	使用時期	使用回数	使用濃度	散布液量	使用方法	総使用回数
温州みかん	摘果	一次生理落果発生期 (満開10～20日後)	1回	500～ 1,000倍	250～500ℓ /10a	立木全面散布 又は 枝別散布	4回以内 (一次生理落果 発生期は1回 以内、二次生理 落果発生後は 3回以内)
		二次生理落果発生期 (満開20～40日後)	1回	1,000～ 1,500倍			
かんきつ (温州みかん を除く)	摘果	生理落果発生期 (満開10～50日後)	1回	1,000～ 1,500倍	250～500ℓ /10a		3回以内

主な注意事項

- 温州みかんにおいて、摘果を目的に使用する場合は、一次生理落果発生期（満開10～20日後）では1回以内とし、2回使用しない。
- 二次生理落果発生期（満開20～40日後）で使用する場合は、一次生理落果の状況を確認した後で使用する。
- 全摘果したい場合は樹全体に、部分的に全摘果したい場合は摘果したい部分のみに散布する。
- 全摘果目的で、効果を高めたい場合は、気温が高くなることが予想される日になつぷりと散布する。
- 間引き摘果の目的で使用する場合は、薬液が葉先から滴り落ちない程度に少なめに散布する。高温下（30℃以上）での散布または散布後に高温が2～3日続くと過摘果になるおそれがあるので、気象条件を見極めてから散布する。また、本剤散布の4～5日前または散布後4～5日の間にマシン油乳剤を近接散布すると過摘果になるので避ける。
- 本剤による摘果が終了した後に仕上げ摘果を行い、品質の均一化や樹勢の維持に努める。

表2 フィガロン乳剤の摘果目的での使用方法

適用作物名	使用目的	使用時期	使用回数	使用濃度	散布液量	使用方法	総使用回数
温州みかん	熟期促進 (間引摘果 をかねて 使用する 場合)	1回目：間引き摘果用 として使用 (満開20～50日後) 2回目：満開70～80 日後 ただし収穫14日前 まで	2回	1回目： 1,000～ 2,000倍 2回目： 2,000～ 3,000倍	葉先からした たりはじめる 程度 (250～500 ℓ/10a)	立木全面散布	4回以内 (1,000倍希 釈散布は2回 以内)

主な注意事項

- 間引摘果をかねて使用する場合は熟期促進だけに使用する場合は第1回目処理の散布濃度及び散布時期が異なるので注意する。
- 熟期促進の目的だけに使用する場合は第1回目処理は、散布濃度が高かったり、散布時期が早いと落果を生ずることがあるので着果量が少ない場合や果実の生育が遅れている場合などには、低濃度（3000倍）又は使用時期の範囲内の後期に散布する。
- 適正な着果量の樹に散布し、着果過多の場合は間引摘果をかねて本剤の処理を行うか、手摘み摘果を行って、適正な着果量にしてから本剤の処理を行う。また着果量が過少の樹では効果が劣るので使用しない。
- 散布は樹冠部全体に均一にかかるようにていねいに行う。
- 熟期促進のために本剤を使用すると、夏芽の発生を抑制するので、夏芽を発生させたい樹には使用しない。
- 連年使用を続けると樹勢が低下する場合があるので、葉色、葉の大きさ等により、樹勢を見極めて使用する。

4 マルチ被覆の準備

近年、温州ミカンで糖度上昇期や収穫前での極端な降雨により、果実品質等の低下(低糖、低酸、大玉化、浮皮)が発生するため、マルチ被覆などの高品質化対策技術が、これまでに重要で重要。特に、小原紅早生はマルチが設置可能な園地では必ず行い、品質向上を心掛けましょう。

設置は早めに準備し、夏場の暑い時期は避けるようにしましょう。直管パイプなどで巻き上げ式にすると、事前に設置して、巻き上げておくことができ、さらに土壌水分の管理がしやすくなります(写真5)。



写真5 マルチを巻き上げ後の様子

5 苗木の管理

カンキツ類の苗木は、十分な管理をしないと樹冠拡大に多大な時間を

要し、未収益期間が長くなります。接ぎ木部から15cm程度までの下部に発生した枝は勢いが強く、主枝の生育を阻害する恐れがあるため、全て芽かぎするとともに、その上部は1新梢1芽に内向きを芽かぎし、強い春枝にします(写真6)。主枝候補枝は支柱などで誘引してできるだけ立たせ、骨格を形成します。



写真6 主枝候補枝を残した苗木の様子

土壌の湿り具合と天候に応じて、早めにかん水を行うことを心掛けてください。また、肥料は切らさないように、窒素主体の肥料を用い、1樹当たりの年間窒素量については、1年目は50g程度で、5月から1〜2か月間隔(冬季を除く)で5回(菜種油粕の場合、1回当たり200g程度)、2〜3年目は80〜100g程度を目安に、3月から6回施用することで、新梢の伸長や充実を図ります。

未結果樹に限りませんが、新梢を加害するミカンハモグリガやアゲハ幼虫を対象として、5月中下旬頃にエ

クシレルSEの高濃度散布(100倍)を行うと効果的です。また、6月以降も、アブラムシ類も含め、1〜2か月間隔でモスピラン顆粒水溶性など他の農薬も活用しながら、防除に努めましょう。

6 花肥の施用

着果が多い樹は、開花で多くの養分を消耗しています。樹勢の低下を防ぐために花肥の施用を行いましょう。温州ミカン、中晩柑類ともに、4月下旬までに花肥として化成肥料で窒素成分5kg程度を施用し、子房の充実を図りましょう。

7 夏肥の施用

夏肥は、樹体に吸収された後に新梢や果実、根などに分配され、樹勢の維持・向上となり、次年産の着花確保に繋がります。着果の多い温州ミカン、中晩柑類を対象に施用し、5月下旬頃に、早生温州ミカン・普通温州ミカンでは窒素成分で5〜7kg/10a程度、中晩柑類では窒素成分で7kg/10a程度を施用します。

近年では、マルチ栽培や完熟越冬栽培など樹体に負担がかかる栽培形態が多いため、特に夏肥の施用を心掛けてください。

一方、不作樹では、着色不良や果皮が厚くなり、糖度の低下などの恐れがあるため、夏肥の施用を控えます。



JA香川県
東讃営農センター
土庄集荷場

担当 土居 和馬

生育については年明けからの気温が低温で推移したため、平年より遅く推移しています。今後、乾燥気味で推移した場合、着果量の多い園地では小玉果が多くなる場合がありますので、大玉果生産を促すためのかん水も重要な作業となります。

1 かん水

降雨が少なく、土壌が乾燥する場合、肥大が抑制され、果肉が硬くなります。また、収穫前に乾燥が続いた後の降雨によって裂皮が生じる恐れがあるので少雨が予想される場合にはかん水を行いましょう。

敷きわらをする事で地温や土壌水分の変化を抑えることができます。また、夏期には干害を防ぎ、根の伸長を促して肥料成分の吸収を良くするため、次年度の増収効果もあります。

しかし、排水の悪い園地では効果は低く、根元までわらを敷くと紋羽病の発生を助長し、生育が悪くなるので注意が必要です。

2 収穫

果実は収穫2〜3週間前になると果皮の緑色が淡くなり、成熟期を迎えます。その後、果皮が黄色くなり、さらに赤みを帯びてくると完熟になります。

果実全体が橙黄色になる完全着色期に収穫しますが、収穫適期は非常に短く、早すぎると酸味が残る、遅れるとしなび果や裂果などの障害果が発生し、商品価値が低下します。外観の観察や食味などで熟度を見極めて収穫適期を逃さないようにしましょう(写真1)。



写真1 着色による熟度の違い「なつたより」

成熟期は、一樹の中でも枝や位置によって異なります。枝毎の成熟は、中心枝の果房が副梢の果房より早く成熟します。着果位置では、樹の下部より上部が、内なり房より外なり房が早く成熟します。そのため、収穫は一樹を2〜3回に分けて行います。

施肥が早すぎると窒素の早効きにより、果肉が硬くなり、へそ青症が発生することがあり、遅すぎると新梢の充実が遅れてしまいます。また、過剰施用すると果実の熟期が遅れるので適量を心がけましょう。

4 ビワキジラミについて

ビワキジラミに起因する「すす病」によって黒く汚染された果実は、商品価値が著しく低下してしまいます。袋かけ前の防除で被害は軽減できますが、それでも発生した場合は選果を徹底し、被害果を除きましょう。収穫時にビワキジラミの被害が多く見られた園地は、収穫終了後(7月中旬頃)に防除を樹冠内部まで十分薬液が届くよう丁寧に実施しましょう。

また、ビワについては新梢や果実に細かい毛があり、薬液をはじくので隙間に隠れているビワキジラミに薬液が届かない場合があります。湿展性の高い展着剤(まくぴか等)を使用し薬液が隙間までかかるようにしましょう。

「すす病」にて黒く汚染された果実を濡れたティッシュなどで擦ると細かい傷となり後に腐敗果となりますので、刷毛等果実を傷つけない素材で除去するように気をつけましょう。

3 夏肥の施肥

収穫直前に年間窒素施用量の3割程度を速効性肥料で施用します。

袋に入れたまま収穫し、衝撃を与えないよう丁寧に運びましょう。乱暴に扱うと果実が果梗部から脱落したり、打ちみによってロス果が発生します。(打ちみについては変色し、後ほど腐敗となるので特に注意が必要です。)

また、袋の中で擦れることで果面の毛が取れて商品価値が低下してしまうこともあります。



1 生育状況

1～3月中旬まで平年より気温が低く推移しましたが、3月下旬の急激な気温の上昇により開花始期が一気に進み平年並みの開花状況となりました。(表1)

2 果実発育

モモの果実肥大は三つの発育段階で構成されます。(図1)

第一期は、満開後約50日であり、この期間は果実の細胞が分裂し、細胞数が増加する期間です。

第二期は、核の硬化と胚の発育が盛んになり、果実肥大が一時的に停滞する期間で、この期間は「硬核期」と呼ばれ、樹体が生理的に最も不安定な時期にあたります。「硬核期」は、一般的に早生品種ほど短く、晩生品種ほど長くなります。

第三期は、硬核期→成熟期までであり、第1期で分裂した個々の細胞が肥大する時期です。

3 摘果

果実肥大の第一期の成長は主に貯蔵養分に依存しているため、初期生

表1 香川県農業試験場府中果樹研究所における品種別開花日

品種名	2025年				2024(前年)				平 年			
	開花始	開花盛	開花終	収穫盛	開花始	開花盛	開花終	収穫盛	開花始	開花盛	開花終	収穫盛
日川白鳳	3/28	4/4	4/10	－	4/1	4/4	4/11	6/24	3/29	4/1	4/7	6/26
あかつき	3/27	4/4	4/12	－	3/31	4/2	4/10	7/11	3/27	3/30	4/7	7/12
なつおとめ	3/27	4/2	4/9	－	3/31	4/2	4/10	7/19	3/28	3/31	4/6	7/23

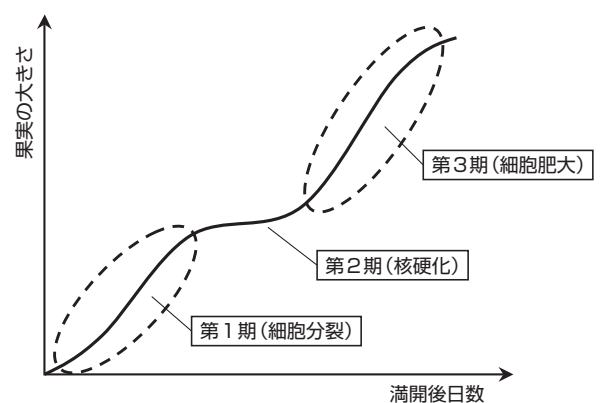


図1 モモの果実肥大(模式図)

育を促すために、摘果による着果制限を行う必要があります。

しかし、急激な着果制限は、樹体の生理的バランスを崩す他、残った果実へ養分が急激に流入し、「核割れ」を助長する原因にもなります。したがって、摘果は①粗摘果②仕上げ摘果③見直し摘果の3段階に分け作業を行ってください。

①粗摘果

満開後20～30日頃、受精果と未受精果の判断ができる段階から行います。取り除く果実は、発育不良果、上向き果、結果枝の基部や先端の果実を中心に、最終着果量の2～3倍程度を目安に摘果を行います。最

終的な着果数は、長果枝で2～3果程度、中果枝で1～2果程度、短果枝は先端付近に着果させ、同一樹内では樹冠上部をやや多め、樹冠下部をやや少なめに着果させます。(図2)

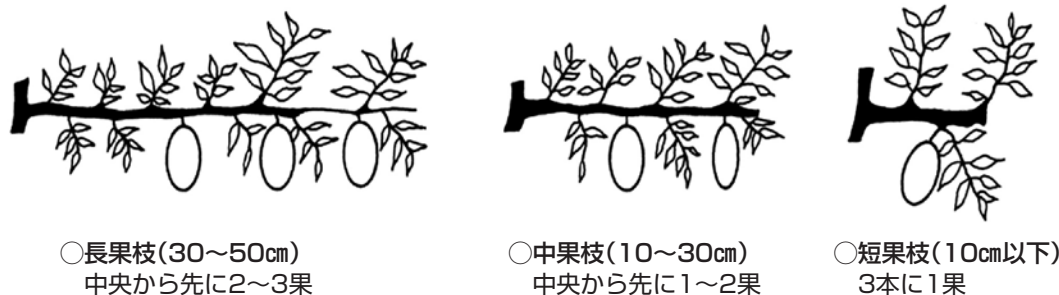


図2 結果枝別における着果状況

②仕上げ摘果

品種の早晩性によって異なりますが、概ね満開後40日頃から始め、果実肥大第二期(硬核期)に入るまでに実施します。また、開花後の気温によっては、生育が促進・抑制されるため、気象状況も考慮して計画的に実施するよう心がけましょう。この際に、縫合線の左右の果肉が5:5に肥大している果実は双胚になっている可能性があります。摘果の段階では双胚果と正常果を見分け、除去するよう努めます。(図3)

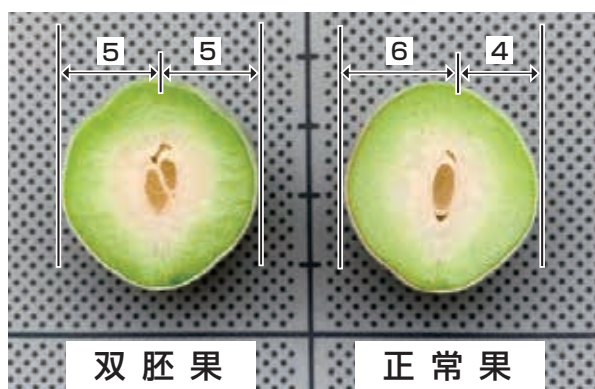


図3 双胚果と正常果

③見直し摘果

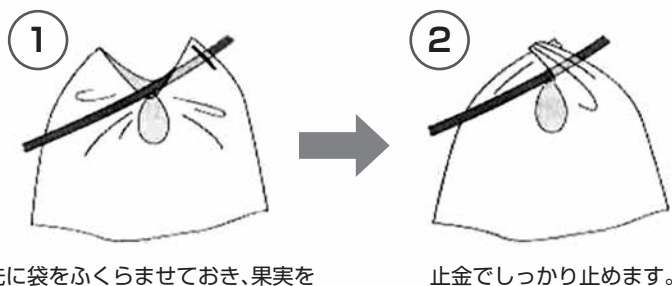
見直し摘果は、硬核期終了後から袋かけと並行して順次取りかかります。

す。この段階では、奇形果や小玉果、傷果、病害虫被害果などを中心に摘果し、最終着果量に調整します。

4 袋掛けの時期と留意点

袋かけは、仕上げ摘果が終了した段階から取りかかります。この際、風雨によって袋が外れないようにしっかりと固定するよう努めます。留め口が十分に閉まっていけないと雨水が入り、病害の原因となる恐れがあるため、しっかりと閉めます。(図4)

なお、袋かけは必ず黒星病や灰星病等の薬剤防除を実施した後にを行います。



先に袋をふくらませておき、果実を袋の中央に入れ、枝の上で袋の両端を寄せます。

止金でしっかり止めます。

図4 袋のかけ方

5 新梢管理

新梢の伸長が旺盛になる5月下旬以降から樹冠内部の日照低下と樹形の乱れを防止し、高品質果実の生産を図るために行います。養分の浪費を防ぎ、果実肥大を促すとともに生理落果などの軽減にもつながります。また、余分な葉枝の除去によって防除薬剤のかけムラをなくし、防除効果を高めます。

方法としては、樹冠を拡大するための新梢を確保しつつ、強いねん枝をするほか、旺盛な生育の徒長枝や多発して混みすぎる場合には基部からせん除しましょう。(図5)

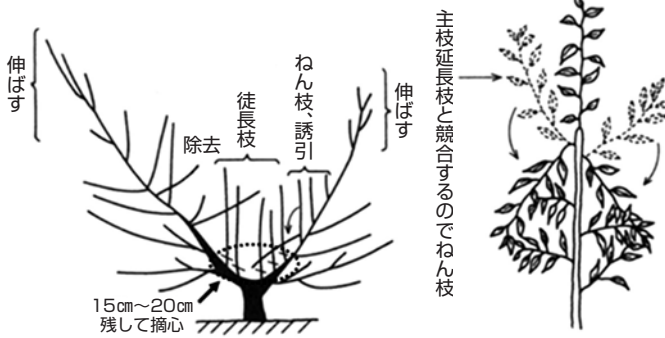


図5 新梢管理の方法

6 病害虫防除

散布時期		病害虫名	基 幹 防 除				
早生種	中・晩生種		薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数) ／使用回数	10a 当たりの 散布量
5月10日頃		カイガラムシ類	トランスフォームフロアブル	1,000倍	100mℓ	7日／3回	400ℓ
		灰 星 病 黒 星 病	ダコレート水和剤	1,000倍	100g	3日／3回	
5月下旬 ～ 6月上旬		モモハモグリガ シンクイムシ類	エクシレルSE	2,500倍	40mℓ	前日／3回	500ℓ
		灰 星 病 黒 星 病 ホモプシス腐敗病	ファンタジスタ顆粒水和剤	3,000倍	33g	前日／3回	
6月10日頃 (収穫前)	6月10日頃	アブラムシ類 モモハモグリガ シンクイムシ類	㊦モスピラン顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日／3回	500ℓ
		灰 星 病 黒 星 病	オンリーワンフロアブル	2,000倍	50mℓ	前日／3回	
6月中下旬		ハダニ類	ダニサラバフロアブル	1,000倍	100mℓ	前日／2回	500ℓ



5月は、無加温栽培では軸長の調整や摘粒などの房づくり作業、トンネル栽培では開花期を迎えます。

近年、基準量以上の着房や大房を生産したり、良い房を見極めるために生育期間の遅くまで着房させたりすることによる過度の負担などによって、樹勢が低下した園地が増加しています。樹勢の低下は、果粒の肥大不足・糖度上昇の停滞を引き起こします。

特に近年、加温栽培において長梅雨・曇天続き・酷暑等により糖度不足となり出荷遅れが発生しています。また収穫期の遅延はカスリ症の多発にもつながります。

思い切って早めに摘房を行い、その後の作業量の軽減と、軸長調整をしつかりと行い、高品質果実の生産および樹勢の維持につなげましょう。

1 シャインマスカット

(1) 新梢管理

新梢の本数は、主枝1mあたり両側で7〜8本にします(写真1)。過

表1 香川県のシャインマスカットの生産基準(成木)

作 型	収 量 (kg／10a)	果房重 (g)	着房数 (房／10a)	着粒数 (粒／房)	果粒重 (g)	主枝 1 mあたり 着房数(両側)
加 温	1800	650～700	2500	36～38	17～19	5
無 加 温	2000		3000	38～40	16～18	6
ト ン ネ ル				40～43	15～17	



写真1 適切な枝管理状況
(結果枝の間隔は25cmが目安)

繫茂を避けることで、受光環境の改善、病害虫の発生予防を実現できます。また、花振るいの軽減(開花前)および果粒肥大の促進とスムーズな増糖(生育期)を目的として摘心を行います。

シャインマスカットは特に摘心の効果が高いので必ず行ってください。

摘心は、結果枝の房先5枚目の葉(元から8枚程度)が展葉した時点で先端の未展葉部分を摘み取ります。なお、葉の枚数が多少増減しても果実品質に大きな影響はないため、数本の結果枝を確認して一定の長さを決め、その基準で一斉に摘心して進むことで、効率的に行うことができます。副梢は房までを2枚、房から先

は1枚で摘心します。シャインマスカットは副梢の発生頻度が高いため、こまめな摘心が重要です。

(2) 摘房

房数の基準は、樹勢が健全な成木では、主枝1mあたり両側で6房(加温栽培では同5房)です。房型が悪い房や花振るいした房を優先的に摘房します(写真2)。周囲に不良な房がなかった場合でも、基準を遵守し、空枝をつくって下さい。摘房が遅れると、着果過多により樹勢低下するとともに、その後の管理において余分な作業時間を浪費することにもつながります。もったいない、という思いは持たないようにしましょう。

また、3年目までの若木については、樹の骨格づくりのため、着房させないようにしましょう。



写真2 房型が悪い房

(3) 軸長の調整

2回目のジベレリン処理直前時点での軸長が7〜8cm(10〜11車)とな

るよう調整します(写真3、写真4)。
シャインマスカットは果房上部の果粒が上を向きにくく、肩部が巻きにくいため、早期の軸長調整が重要です。原則として肩部を切り下げて調整しますが、房尻が間延びしている場合や粗着な場合には房尻を切除します(写真5)。ただし、房型を切除すると、果房が横に張り、房型整形が難



写真3 軸長調整前
(ジベ2回目直前)



写真4 軸長調整後

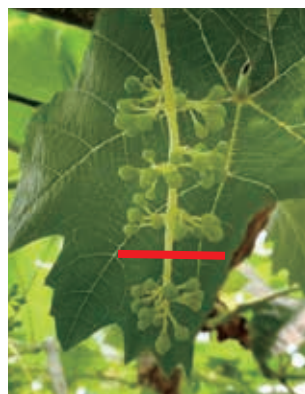


写真5 房尻を切除する場合

しくなるため、なるべく房尻を活用するようにしましょう。

(4) 粗摘粒

摘粒作業は、1回目のジベレリン処理後3〜5日目から始め、軸長の調整とともに実施することで、その後の作業効率が上がるとともに、果粒肥大や粒揃いが向上します。

小粒果・内向き果・傷害果を優先して摘粒し、最終着粒数の1割増しを目安にします。

(5) 仕上げ摘粒

2回目のジベレリン処理の後、硬核期までに仕上げ摘粒を行います。この際、横並びになっている粒の間隔を十分に空けることを意識します。間隔が狭いと、果粒が肥大の途中で内側に押し出され、玉直しの時に取り出せなくなる可能性があります。上下に連なった粒は、玉直しの時に比較的動きやすいことから、無理に摘粒する必要はありません。

(6) 硬核期・玉直し

満開後30〜45日の間は硬核期となります。この時期に摘房や摘粒などの房管理・極端な副梢管理・極端なかん水は絶対に行わないようにして下さい。樹体内の環境が大きく変わると、縮果症の発生を引き起こします(写真6)。また、縮果症が発生した果粒についても、硬核期の間は除去せ



写真6 縮果症が発生した果粒



写真7 玉直し前(内側にあった果粒は外側に出す)



写真8 玉直し後(果粒を縦に並べて肩卷きを良くする)

ず、果粒軟化後に摘粒して下さい。

また、この期間中に玉直しを行うことで、房型を向上させることができます。内側に入り込んだ果粒は外側に出し、交差している果粒は並び替えて整理することで、果粒がきれいに並ぶようにします(写真7、写真

8)。なお、果粒に直接触ると果粉が剥がれるため、作業の際には手袋を着用したり、割り箸を利用したりするようにしましょう。

(7) 見直し摘粒

樹の半分程度の房で果粒軟化(水回り)が確認できた段階で、房管理や副梢管理を再開します。見直し摘粒では、横に張り出して房型を損なう果粒や未熟果(石ぶどう)、小粒果を除去します。

(8) 袋かけ

房管理が完了すれば、アザミウマ類の防除を実施した後、袋かけを行います。原則としては白色の果実袋を用いますが、果房に直射日光が当たりやすい部分などでは、遮光率が高い袋を利用したり、袋の上にカサをかけたことで日焼け障害を避けることができます。

2 ピオーネ

(1) 新梢管理

新梢の本数は、主枝1mあたり両側で10本にします。結果枝先端は房先8枚程度、副梢は房までは1〜2枚、房より先は0〜1枚を目安に摘心を行います。

(2) 摘房

房数の基準は、樹勢が健全な成木では、主枝1mあたり両側で6房です。ピオーネでの着果過多は、着色不

良の大きな原因となります。樹勢に応じて適切な着房数に調節しましょう。

(3) 軸長の調整

2回目のジベレリン処理直前時点での軸長が5cm(7〜8車)となるよう調整します。1房500〜550gの房を目指しましょう。

(4) 摘粒

小粒果、内向き果、傷害果を優先して摘粒し、1房あたり35〜40粒になるよう上げます。ジベレリン一発処理を行った園地については、初期肥大が良好であるため、内側に入った果粒は早めに除去します。

着色初期に、飛び玉状にいくつかの果粒が濃く着色し始める状態が良好です(写真9)。房全体がぼんやりと着色し始める場合には、この時点でも摘房・摘粒を行い、着色を促して下さい。



写真9 良好な着色初期

(5) 環状剥皮

5年生以上の成木において、樹勢

が強く果粒肥大が良好で、着色不良となりやすい樹については、環状剥皮の実施を検討しましょう(写真10)。処理により、着色向上が望めます。なお、着果過多の樹については、処理の効果は望めませんので、まずは、適正着果量への調節を第一に考えて下さい。また、若木や樹勢が弱った樹において処理を行うと、根の生育が不良となり、樹が枯死する場合もあるので実施しないようにして下さい。

環状剥皮の手順については以下の通りです。

①処理時期は満開後30〜40日です。適期を逃すと効果が劣るので、適期以外では実施しません。

②剥皮処理は、主幹に幅5mm〜1cmで行います。これ以上に幅を広げ

ても効果は変わらず、癒合不良にもつながります。

③切り込みを入れていき、刃が止まったところが木質部となります。

④内側の薄皮まできれいに除去します。薄皮が少しでも残ると、効果が大きく劣ります。マイナズドライバー等で仕上げるときれいに剥がすことができます。

⑤剥皮部にトップジンMペースト等の癒合促進剤を塗布後、ビニールテープなどで保護します。

⑥約1か月後にテープを除去します。除去が遅れると、癒合部にテープが食い込み、癒合不良によって樹勢が低下する可能性があるため気をつけましょう。



写真10 環状剥皮処理

JA香川県
中讃宮農センター
綾歌南部集荷場
担当 **神余 泰彰**

本年は1月から3月中旬にかけて
 気温が平年より低く推移したことか
 ら、発芽と展葉時期は平年より少し
 遅れました(表1)。摘蕾、新梢管理が
 遅れないよう、こまめに作業をしま
 しょう。またカイガラムシの発生が
 懸念されますので、適期防除等十分
 な対策をお願いします(写真1)。



写真1 越冬していたカイガラムシ

1 摘蕾

摘蕾は今後の果実肥大に大きく関
 わる作業となります。早めに摘蕾を
 行い、着果量を調整することで果実
 肥大に必要な細胞を増やし、安定し
 た大玉生産を目指しましょう。

基本的に太秋や富有は1つの結果

表1 主要品種の生育ステージ(香川農試府中果樹研)

品種名	2025年				2024年				平 年			
	発芽	展葉	満開	収穫盛期	発芽	展葉	満開	収穫盛期	発芽	展葉	満開	収穫盛期
早 秋	3/23	3/29	—	—	3/22	3/30	5/12	10/15	3/14	3/25	5/14	9/29
太 秋	3/24	3/30	—	—	3/24	4/3	5/12	10/4	3/21	4/1	5/13	9/29
松 本	3/25	4/1	—	—	3/25	4/3	5/16	11/12	3/19	3/30	5/16	10/29
富 有	3/25	4/1	—	—	3/25	4/3	5/17	11/20	3/26	3/31	5/18	11/15

※平年は過去10年間の平均



- 残す蕾
- 除去する蕾
- 二番花 (除去)
- 裏枝は枝ごと除去

写真2 富有の摘蕾について

枝につき1蕾とし、早秋については
 2蕾として下さい。奇形や生育の遅
 いもの、新梢の基部に着いたものは
 除去しましょう。枝が細く樹勢が弱
 い場合はしっかりと着果しない場合
 がありますので、充実した枝に蕾を
 残すようにして下さい(写真2)。

残す蕾

- ・新梢中央部
- ・大きいもの
- ・へたの大きいもの
- ・横、斜め下向きなもの
- ・傷のないもの

除去する蕾

- ・新梢基部の一番目
- ・葉が5枚以下、弱い新梢に着果す
るもの
- ・奇形
- ・近接する枝に当たるもの
- ・主枝、亜主枝の新梢に着生するもの
- ・二番花

また果実が肥大した際に他の枝で
 傷がつくことがありますので枝同士
 が密集しないように注意して下さい。

2 新梢管理

枝同士が密集すると日当たりや、
 農薬散布に影響が出るため、果実の
 肥大不良や病害虫発生を引き起こす
 要因となります(写真3)。新梢の向
 きと日当たりを勘案し、展葉2〜3



写真3 炭疽病が発生した新梢

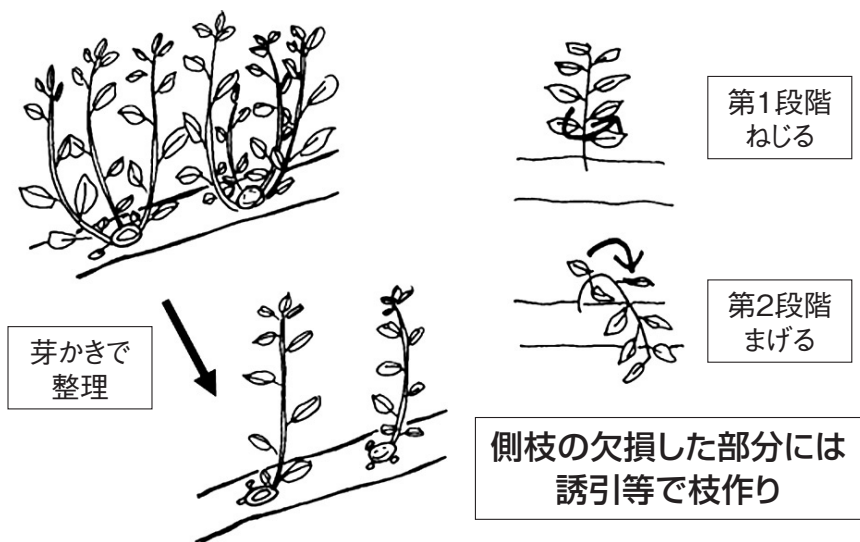


図1 新梢管理

枚頃に不要な枝を除去しましょう。
翌年産の結果母枝とする為に新梢が
固くなり誘引が難しい場合は捻枝を
行い、枝づくりをしましょう(図1)。

③ かん水

開花後、晴天が続く場合、7～10日
おきにかん水を行って下さい。特に
若木、苗木は夏の乾燥に弱いので注
意しましょう。

④ 病害虫防除

乾燥防止として敷きわら、敷き草
を樹冠下に敷くのも有効です。

降雨が長く続くと炭疽病や灰色カ
ビ病などの病気が出やすくなる為、
農薬の散布だけでなく、排水対策や
通風の改善を行って下さい。
発病した枝が見られた場合は放置
せず園外撤去してください。

表1 府中果樹研究所における発芽日

品 種	発 芽 日		
	令和7年	令和6年	平年値
キウイっこ1号	3月18日	3月12日	3月12日
キウイっこ5号	3月22日	3月16日	3月14日
さぬきエメラルド	3月25日	3月28日	3月21日
さぬきエンジェルスイート	3月24日	3月28日	3月23日
さぬきゴールド	3月28日	4月3日	3月28日
ハイワード	3月27日	4月3日	3月29日
香緑	3月27日	4月4日	3月29日
マツア	3月28日	4月2日	3月28日
トムリ	3月28日	4月8日	3月30日

平年値は過去10年の平均値（H27～R6）

1 生育状況
(1) 発芽状況
発芽は、2月が平年より低温で推移したため、発芽の早い「さぬきキウイっこ」などは、平年より5日から1週間程度遅かったです。しかし、3月



図1 捻枝による誘引

の下旬が急激に高温となったため、さぬきゴールドや香緑などの発芽日は平年並みとなりました。

2 新梢管理
(1) 誘引
誘引は、まず結果母枝先端の結果枝から4月中下旬頃に始めます。次に発芽の遅い突発枝を5月以降に順次棚づけします。この作業が遅れると、風による折損が多くなるので遅れないように行います。また、風ズレにより花腐れ症状が助長されるので注意が必要です。

新梢基部が軟らかい時期（4月中下旬）に誘引すると折れにくく作業しやすいです。新梢基部が硬化する5月以降は捻枝を行い、棚に添わせて誘引します。

表2 府中果樹研究所における開花盛期

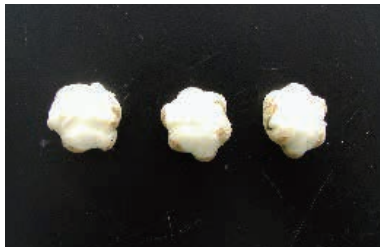
品 種	開花盛期	
	令和6年	平年値
キウイっこ1号	5月1日	5月3日
キウイっこ5号	5月3日	5月4日
さぬきエメラルド	5月4日	5月5日
さぬきエンジェルスイート	5月4日	5月6日
さぬきゴールド	5月7日	5月8日
ハイワード	5月15日	5月16日
香緑	5月16日	5月18日
マツア	5月15日	5月14日
トムリ	5月17日	5月17日

平年値は過去10年の平均値（H27～R6）

(2) 摘心
新梢の伸びが弱まった枝に摘心を行うことで、その枝は落ち着き、巻き付きが抑制できます。強く伸びる枝に摘心を行った場合、副梢が発生します。副梢は1～2節残してせん除します。

3 授粉
(1) 品種別の開花期について
本県主要品種の令和6年産および平年の開花盛期は表2のとおりです。今年の生育状況に応じて、授粉作業をお願いします。

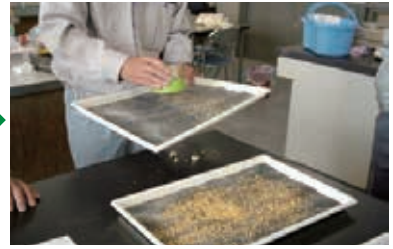
(2) 花粉の採取



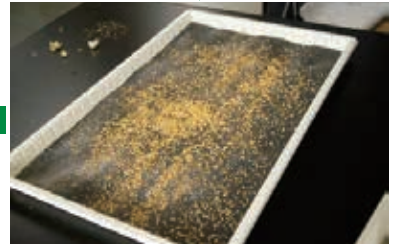
①開花直前から当日開花した花を採取する



②採薬器で薬を採取する



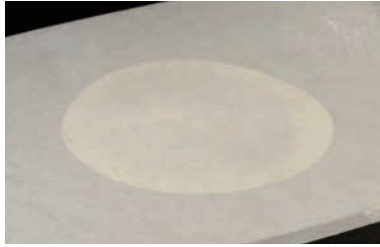
③採取した薬をふるいにかけて、花弁や不純物を取り除く。



④常温で一昼夜開薬させる



⑤100～120メッシュのふるいで花粉を採取する



⑥精製された花粉

図2 花粉の採取方法

(3) 花粉の貯蔵



②花粉を葉包紙などで包む



①花粉を5～10gに小分けする



③湿気防止のためシリカゲルを入れた茶筒などで密閉する



④冷凍室で貯蔵する

図3 花粉の保存方法

(4) 人工授粉

人工授粉には、溶液授粉と粉末授粉があり、県内では溶液授粉が主流です。雌花の受精可能期間は開花3日後までですので、花弁が褐変しないうちに授粉します。開花始め、満開前後の計3回程度授粉します。

気温が15℃以下の場合、花粉管の伸長が低下して受精不良になるため、授粉を避けます。

授粉に使用する花粉は、使用前日に冷蔵庫(5℃)に移して、温度順化をします。貯蔵花粉を使用する場合は、発芽率が低下している可能性があるため、使用前に確認するようにしましょう。

1. 溶液授粉

少雨であれば、授粉作業が可能ですが、晴天時より、丁寧に行うことを心がけましょう。

液体増量剤で希釈し、ハンドスプレー等で柱頭にムラなく吹き付けます。液体増量剤で花粉を混和する際には、泡が消えるまでよく攪拌してから使用します。花粉混濁液は5分ほどで花粉が沈殿するため、随時、容器を振って攪拌させます。

花粉混濁液は調整後2時間までは授粉可能ですが、可能な限り早めに使い切ります。液体増量剤は常温で保存し、使用期限が過ぎたものは使用しないよう注意が必要です。

輸入花粉を使用する場合の推奨希釈倍率は表3のとおりです。アメリカ産花粉を使用する場合は花粉発芽率が低く、小玉傾向になる恐れがあるため、希釈倍率200～250倍で使用します。

2. 粉末授粉
石松子等の増量剤で10〜30倍に希釈した花粉をポレンダスター等で柱頭にむらなく吹き付けます。10a当たりの必要量は約200〜400gです。

表3 キウイフルーツ輸入花粉の発芽率と液体授粉希釈倍率について

	花粉発芽率	推奨希釈倍率	授粉液 1L当たりの花粉量
ニュージーランド産	79.9%	250〜333倍	3〜4g
アメリカ産	65.3%	200〜250倍	4〜5g



図4 開花期

図5 授粉後の花



【摘果する果実】
A:カメムシ被害果 B:スレ果 C:ツノ果 D:すじ果

図6 「さぬきゴールド」の摘果果実

(1) 摘果時期
キウイフルーツは果実の肥大特性から満開から1か月間で概ね果実の大きさが決まっています。そのため、1回目の摘果はできるだけ早く、開花15日頃から一通り行います。2回目は仕上げ摘果とし、満開後30日までには終わらせません。

(2) 摘果する果実
側果、奇形果、小玉果、病害虫被害果など

4 摘果
近年の異常気象により、樹勢が低下した樹が散見されています。昨年についても夏秋期が高温乾燥で推移したため、樹体への影響が懸念されます。樹勢維持のためにも、樹の状況に応じた着果管理を行いましょう。

表4 キウイフルーツの摘果基準

	枝に残す果実の数				
	枝長10cm以下	枝長30cm以下	枝長90cm以下	枝長120cm以下	枝長120cm以上
香緑	2〜3本に1果	1果	2果	2〜3果	2〜3果
ヘイワード	2〜3本に1果	1果	2果	3〜4果	4果
さぬきゴールド	0果	1果	2果	2果	2〜3果

表5 キウイフルーツ品種別の収量目標

	着果数(果/㎡)	平均果重(g)	収量(t/10a)
香緑	15〜20	100〜110	1.8〜2.0
ヘイワード	20〜25	110〜130	2.2〜2.5
さぬきゴールド	10〜15	140〜160	1.8〜2.0

(3) 摘果の程度
最終葉果比は5〜6枚/果、1㎡当たり15〜20果(「さぬきゴールド」は10〜15果)を目安とし、表4のとおり枝長に応じて調整します。

5 袋かけ
できるだけ雨に遭わないように摘果終了後(6月上中旬)に行います。雨滴の侵入を防ぐため、留め金をしっかりと留めます。袋かけにより、日焼け防止、秀品率の向上、果実軟腐病の抑制効果があります。
また、袋の枚数から最終着果量を確認し、多い場合は摘果しましょう。

- 最も基部の果実①は小玉になりやすい(香緑やヘイワードは扁平果に)
- 果実②〜④は肥大するが重なりやすい(風ズレやキイロマイコガの被害の恐れ)横方向に大きく肥大するため、果実間隔は十分空ける
- 果実⑤は、果実②〜④と比べて小玉になりやすい
残す果実の組合せは②と④



図7 さぬきゴールドの摘果

(4) さぬきゴールドの摘果

Ⅵ 病害虫防除

香緑・ヘイワード・讃緑

月	旬	基 幹 防 除						確 認 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
5	上												
	中							灰 色 か び 病 (降雨が多い場合)	ファンタジスタ 顆粒水和剤	4,000倍	25g	前日、3回	400ℓ
	下	果 実 軟 腐 病	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	カ メ ム シ 類	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
		果 実 軟 腐 病	ベルクート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	中												
	下							果 実 軟 腐 病 灰 色 か び 病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ

さぬきゴールド

月	旬	基 幹 防 除						確 認 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
5	上												
	中	灰 色 か び 病	ファンタジスタ 顆粒水和剤	4,000倍	25g	前日、3回	400ℓ						
	下	果 実 軟 腐 病	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回		カ メ ム シ 類	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
		果 実 軟 腐 病	ベルクート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	中												
	下							果 実 軟 腐 病 灰 色 か び 病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ

さぬきエンジェルスイート・さぬきエメラルド

月	旬	基 幹 防 除						確 認 防 除					
		対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量	対象病害虫	薬剤名	使用濃度	100ℓ当たりの薬量	使用時期 (収穫前日数、 使用回数)	10a 当たり 散布量
5	上												
	中							灰 色 か び 病 (降雨が多い場合)	ファンタジスタ 顆粒水和剤	4,000倍	25g	前日、3回	400ℓ
	下	果 実 軟 腐 病	トップジンM 水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
6	上	キウイヒメヨコバイ キイロマイコガ	ⓂパダンSG 水溶剤	1,500倍	66g	30日、3回	400ℓ	カ メ ム シ 類	スタークル 顆粒水溶剤	2,000倍	50g	前日、3回	400ℓ
		果 実 軟 腐 病	ベルクート水和剤	1,000倍	100g	前日、5回							
	中												
	下							果 実 軟 腐 病 灰 色 か び 病 (降雨が多い場合)	ナリアWDG	2,000倍	50g	前日、2回	400ℓ

※赤字は昨年からの変更点



はじめに

農薬の登録内容は随時更新されているため、使用前日数や回数、希釈倍数等については使用前にラベル等で確認しましょう。また、農薬散布の際には、近接圃場の栽培作物、学校などの公共施設や住宅地等に農薬が飛散しないよう細心の注意を払いましょう。

カンキツ

1 灰色かび病

開花期前後に多湿条件が続くと、病原菌の胞子が花弁に付着して繁殖します(写真1)。幼果にその花弁が長期間接触するとその箇所がかさぶた状の傷となり、商品価値の低下につながります。菌の増殖を抑えるために適正な整枝せん定を行い、樹冠内部の通風、採光を良くしましょう。

2 黒点病

枯れ枝で越冬した病原菌の胞子



写真1 カンキツ 灰色かび病

3 かいよう病

が、降雨で葉や果実に感染します。このため、枯れ枝の多い園や雨量の多い年は被害が多くなります。防除暦に記載されているマンゼブを含む殺菌剤(ジマンダイセン、ペンコゼブ)については、前回の防除以降の積算降水量200〜250mmを目安に樹全体に薬液がかかるように丁寧に散布してください。

葉や枝に形成された越冬病斑が、第一次伝染源となります。降雨の際に、越冬病斑から病原菌が、春梢に感染していきます。感染は新葉や軟弱な枝で起こりやすく、組織が硬化すると少なくなります。新しい病斑ほど病原菌の増殖が旺盛であり、銅剤による初期防除が重要です。銅剤を

使用する場合には薬害軽減のためクレフロンを加用してください。

4 訪花害虫(コアオハナムグリ、ケシクスイ類)

開花期に花粉や花蜜を求めて花に飛来し、幼果に傷を付けます。防除時期は2〜3分咲き頃です。防除暦に記載されている訪花害虫対象の薬剤はエクシレルSEですが、ダントツ水溶剤などのミツバチへの影響が大きい薬剤を使用する場合は、圃場近辺に養蜂箱がないことを確認してから使用しましょう。

5 ミカンハダニ

梅雨明け頃から発生が急増します。その前に高度精製マシン油乳剤(97%)による散布が重要です。マシン油乳剤は、虫体を油で包み込み窒息死させる薬剤ですので、ダニに薬液が直接かからないと効果を発揮しないため、ダニが多く発生する葉裏までかかるように丁寧に散布してください。

モモ

1 せん孔細菌病

新梢の皮部組織内で越冬した病原菌は、風雨により飛散し、植物の気孔や傷口から侵入します。葉では穴が空いて落葉することがあります。果



写真2 モモ せん孔細菌病



写真3 モモ せん孔細菌病

実では褐色の不整形の病斑が生じ、ひびが入ったりヤニが出たりします(写真2:葉、写真3:果実)。多発条件は、春季の高温多雨と6〜8月の低温多雨です。雨が多い場合は5月中下旬頃にマイコシールドを追加散布してください。

2 灰星病

前年の発病果(残骸)や枝で越冬した病原菌は4月頃から胞子を形成し、まず花に感染して花腐れを起します。次に枝で病斑を形成して、果実への伝染源となります。薬剤防除は本病と同様に果実を腐敗させる病害であるホモプシス腐敗病と兼ねて、5～6月に実施しましょう(写真4)。



写真4 モモ 灰星病

3 モモハモグリガ

展葉直後から被害が見られるようになり、その後、徐々に増えながら発生を繰り返します。5～6月の薬剤防除が不十分な場合には、薬剤の効きにくい卵、老齢幼虫、蛹が混在するようになり、薬剤を散布しても虫が

減らない状況になるため、葉に小さいうず状の食害痕を確認した場合には5～6月の防除を徹底しましょう。

4 シンクイムシ類

新梢に食入して芯折れ(主にナシヒメシンクイによる加害)を発生させるほか、果実に食入(主にモモノゴマダラノメイガによる加害)して商品価値を無くします。なお、コンフューザーMを設置しているところでは、ナシヒメシンクイの被害軽減はできますが、本剤はモモノゴマダラノメイガには効果が期待できませんので、果実被害が認められる場合には追加防除が必要になります。昨年秋期はナシヒメシンクイの発生が多かったことから、より注意しておきましょう。

5 カイガラムシ類(ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシ)

近年、地域によってはカイガラムシ類の発生が多い地域が見られます。モモを加害するカイガラムシ類には、ウメシロカイガラムシ、クワシロカイガラムシ、ナシマルカイガラムシなどがあります。ウメシロカイガラムシはクワシロカイガラムシより幼虫のふ化最盛期が7日前後早いなど、カイガラムシの種類によって

幼虫のふ化時期が異なっており、それに伴い防除適期が異なりますので、地域や圃場内で発生しているカイガラムシ類の種類を確認して防除を行うようにしてください。

力キ

1 炭疽病

枝の病斑で越冬した後、降雨とともに新梢に感染し、5月頃には病斑を形成します。6月下旬頃から枝や新梢上の病斑で形成された胞子が果実へ飛散して黒色の病斑を形成します。昨年、被害が多かった圃場においては、枝での越冬菌量も多いと考えられるため、梅雨期の防除は十分に行う必要があります。春梢の発病が多いと果実の被害が多くなるため、発病枝の切除を徹底してください。防除暦に記載されている炭疽病対象の薬剤は保護殺菌剤が主体ですので、樹全体に薬液がかかるよう丁寧に散布してください。

2 落葉病類(角斑落葉病、円星落葉病)

前年に落葉した葉の病斑内で越冬し、春先に胞子が形成されます。胞子は空気中を漂い、葉の気孔などから侵入します。発病が見られるのは主に秋以降ですが、感染時期は5月上

旬から7月上旬頃で、この時期に防除を徹底しておく必要があります。

3 カイガラムシ類(フジコナカイガラムシ)

本害虫は果実に寄生すると商品価値がなくなる重要害虫の一つです。粗皮の隙間などで越冬した虫が新梢に移動して産卵し、5月中旬～6月中旬に孵化した第1世代幼虫が枝の隙間や幼果のへた付近で見られるようになります。第2世代以降は防除効果が上がりにくいいため、第1世代幼虫の発生期が防除の適期となります。果実が肥大してからでは薬剤がかかりにくくなるので、この時期に十分な散布量で丁寧に防除しましょう。

4 カキノヘタムシガ

粗皮下の繭の中で越冬した幼虫は5月中旬～下旬に羽化し、結果枝の先端付近の芽に多く産卵します。孵化した第1世代幼虫は芽を食害しながら移動し、果実に食入します。防除適期は幼虫が芽を食害している時期で、越冬世代成虫発生ピーク(例年5月18日頃)の7～10日後にあたります。年によって発生ピークに差がありますので農業試験場病害虫防除所から発表される病害虫発生予察情報等で確認して、適期に防除するようにしましょう。

ブドウ

1 べと病

露地やトンネル栽培では5月～6月の開花前後から発病し始め、5～6月に雨が多く低温で経過するよう場合には、開花前に花穂に白いカビを生じて大きな被害となることがあります。発病後では防除効果が落ちるため、展葉5～6枚期から定期的に予防散布を行います。防除暦に記載されているストロビドライフロアブル等のQオー剤では、耐性菌が発生しやすいので連用せず、他の系統の薬剤とローテーション防除しましょう。

2 灰色かび病

開花期前後に感染しやすく、この時期の被害が大きい病害です。開花10日前から落花期に降雨や曇天が続くと発病しやすくなります。落花後の幼果では、さび果となって肥大が妨げられます。ハウス栽培では過湿にならないよう換気をはかりましょう。フルーツセイバー等のSDHI剤やストロビドライフロアブル等のQオー剤、またトップジンM水和剤などでは野菜や花き類では薬剤耐性菌が確認されていますので、ブドウで本病害対象にこれらの薬剤を使用

用して効果が低いと思われる場合は他系統の薬剤を使用するようにしてください。

3 晩腐病

病原菌は結果母枝や切り残した穂梗、巻ひげ内で菌糸の形で越冬した後、6～7月の梅雨期に盛んに胞子形成し、雨滴とともに果実に達して感染します。感染後、ほとんど症状を現すことなく潜伏し、果実の酸が減少する着色期になって発病します。で、発病を見てからの防除では手遅れになります(写真5)。このため薬剤防除は落花と小豆粒大の時期に行いましょう。



写真5 ブドウ 晩腐病 (シャインマスカット)

4 チャノキイロアザミウマ

開花前の新梢伸長期から発生し、

果穂に寄生されると、幼果ではかさぶた状の斑点が生じ、穂軸では褐色の鮫肌状になり、果実肥大や着色不良などの原因になります。開花期前後の防除を徹底しましょう。また、他県ではアドマイヤー顆粒水和剤などのネオニコチノイド系薬剤の効果が低い個体群が確認されていますので注意が必要です。

5 カイガラムシ類(クワコナカイガラムシ、フジコナカイガラムシ)

近年カイガラムシ類の被害が増えています。クワコナカイガラムシやフジコナカイガラムシ類の多発園ではスタークル(アルバリン)顆粒水溶剤の樹幹塗布を幼果期までに行うとともに、開花直前にはトランスフォームフロアブルを丁寧に散布しておきましょう。

キウイフルーツ

1 果実軟腐病

粗皮や老化した枝の組織で越冬した後、6～7月の梅雨期に盛んに胞子を形成します。胞子は雨滴とともに果実に達し感染します。感染した菌はほとんど症状を現すことなく潜伏し、貯蔵中に発病します。薬剤防除は幼果期～果実肥大期にトップジンM水和剤を散布しましょう。また、樹

勢を適正に管理するとともに、袋かけも有効です。

2 灰色かび病

落弁期と貯蔵中に発生します。他の果樹類の灰色かび病と同様に5～6月の気温が低く、湿度が高い場合は発病が多くなりますが、落弁期に雨が多い場合は特に注意が必要です。花弁(花カス)や雄ずいが落下しないので幼果に付着すると、付着部分の毛茸を褐変させ(写真6)、果皮に傷をついたりするため、受粉作業後には花カスの除去を行います。ロブラル水和剤やトップジンM水和剤は野菜や花き類では耐性菌が確認されていますので、本病害にこれらの薬剤を使用して効果が低いと思われる場合は他系統の薬剤を使用するようにしてください。



写真6 キウイフルーツ 灰色かび病

3 かいよう病

感染枝ではせん定傷や皮目、亀裂等から病原菌を含む白色又は暗赤色の樹液が漏出する場合があります。伸長中の新梢が感染すると水浸状と



写真7 キウイフルーツかいよう病:新梢の枯死



写真8 キウイフルーツかいよう病:葉の褐色斑点

なり、次第に黒色となり、亀裂を生じて萎凋・枯死します(写真7)。また、二次感染した葉に不整形の褐色斑点が発生する場合があります(写真8)。樹体内の1〜2本の枝に発病がみられるなど症状が軽い場合は、圃場全体に薬剤を散布した後、感染樹の発病部分を切除しましょう。原則として、切除は発病部位(葉、枝等)の基部寄りから行いましょう。切除した枝・葉は圃場外に出し、埋没または焼却等により感染源にならないように処分しましょう。

本病に酷似した疑わしい症状がある場合は、速やかに最寄りの農業改良普及センターやJA営農センターもしくは農業試験場病害虫防除所へ連絡してください。

4 カイガララムシ類(クワシロカイガラムシ)

キウイフルーツに発生するカイガラムシ類はクワシロカイガラムシ(写真9)が主体です。防除適期は第1世代幼虫のふ化最盛期〜5日程度とされています。近年、暖冬の影響でふ化最盛期が早まる傾向があり、昨年県内7か所での調査を行った結果、4月下旬〜5月上旬頃にふ化最盛期が確認されました。防除暦確認の4月下旬に配置されているアプロード水和剤は幼虫ふ化前〜幼虫

ふ化直後に散布すると効果が高いので、ふ化最盛期を確認して適期に散布するようにしましょう。また、薬液がしっかりとかかるよう丁寧に散布しましょう。



写真9 キウイフルーツ
クワシロカイガラムシ:クワシロカイガラムシのふ化幼虫

● 共通害虫

1 果樹カメムシ類(チャバネアオカメムシ、ツヤアオカメムシ、クサギカメムシ)

昨年は例年より早い4月下旬頃からの加害が確認され、モモでは幼果時期からの加害が集中し収穫量が減少する事例が確認されました。また、カンキツやカキ等では効果が吸汁害で早期に落果した事例もありま

した。果樹カメムシ類は夕方・夜間に飛来し加害するため、防除を行う際には夕方の一斉に防除を行いましょう。薬剤の選定にあたっては、剤の性質によって使い分けが好ましいです。有機リン剤(1B)は、殺虫効果が高いが、残効は3日程度と短いです。合成ピレスロイド系剤(3A)は、殺虫効果と吸汁阻害効果に優れ、残効も1週間以上あります。ただし、天敵への影響が強く、ハダニやアブラムシのリサージエンス(害虫が薬剤散布前よりも、かえって多くなる現象)を引き起こす場合がありますので注意する必要があります。ネオニコチノイド剤(4A)は、吸汁阻害効果の残効は比較的長いものが多いですが、殺虫効果や降雨の影響は、剤により違いがあるので、特性に留意して使用しましょう。本年度の発生量については、昨年秋季の発生が平年並みで推移したことから、平年並であると予想しております。一方、発生時期については4月以降の気温が高く推移した場合には発生時期が早まる恐れがありますので農業試験場病害虫防除所ホームページにある害虫発生動向データや病害虫発生予察情報を参考にして園地における発生が多い場合には確認防除を実施してください。